# 勝利の女神

斉藤　英俊

近頃は新入部員の数に困らぬそうで今年などは大勢いると聞く。小生らが入学した年は、いや毎年の行事かも知れないが、合格と同時に上級生等が鵜の目、鷹の目で目ぼしい人間を手当り次第に勧誘していた。しかし、小生が如き者にまで及んできたのだから、数さえそろえればよいのかなとさえ思った位だった。入部した当時は新部員が少なくて、基礎練習ではみっちりと可愛いがられて悪臭放つ部室のしきいが増々高くなるのを痛感したものだった。練習もフォーメーションになると、文字通りのボール拾い、ゴールの後ろでもっぱら声を張りあげて先輩諸氏の動きを観察した(つ)もので、ひ弱な、やせた軀の小生は、もっと体格がよければ活躍してやるのにと思ったものだった。試合、確か府民大会の時だったろうか、春日丘高迄いった時、これが高津の強さの程を自分にしらせてくれた試合の最初のものであった。北野高に軽く一蹴された試合であった。しかし、先輩の指導によりめきめきと上達した我ハンドボール部が、何度目かの全盛期を迎えるのは周致のところである。夏が盛りになる頃、合宿でしぼり上げられる。覚悟はしてるものの、息もつげない程たて続けに、炎天下でシボラレタのはこたえた。しかし、さすがに、合宿が済むと効能がでてきたのか、動きやすくなった。合宿後の試合に負けてはなるもんかという気持が他の時より余計したものである。時移り、三十四年春たけなわの頃、格別なる指導者、額田、中江両氏の名コーチの手引きと、新三年生の手腕とチームワークの良さが、皇太子殿下御結婚奉祝と銘うった第十三回大阪府民体育祭において、我高津ハンドボール部に優勝杯をもたらしたのである。波に乗った高津ハンドは第二回近畿大会大阪予選においても桜塚高、三国ヶ丘高をものともせず第一位を獲得し、三国ヶ丘高と共に和歌山へ遠征、この近畿大会においても準決勝まで順調に歩を進めた

我高津の前に強敵兵庫県立工業高校が現われ、シーソーゲームを繰りひろげ、勝利は掌中に落ちたかと思われたが、勝利の女神は我高津に微笑まず、惜敗した。しかし、小生に一番あざやかに残っている試合は、いったん引退しした三年生まで繰りだして戦ったその年の全日本高校選手権大阪予選の決勝、相手はしぶとい三国ヶ丘高、まさに宿敵というべし。梅雨も明け、初夏の陽ざしがにわかに消え、曇って、車軸を流す様な雨、あわや試合は流れるかと思われたが、一時間以上も降った雨はピタッと止み、レフリーのホイッスルは鳴った。しかし、ぬかるんだ地はスパイクを用なしにした。三国ヶ丘は意地の汚ないフリースローを繰りかえし、ペースを乱した。時間は残り少なくなるが一点の差で追う。フォワードのシュートもバーにばかり当る。時間ばかり気になった。しかし、遂にタイムアップを宣するホイッスルがなった。全身の緊張は解け心身ともにがっくりしたものであった。こうして振りかえってみると部史の何分の一かに参与しただけであるが、意義深いものがあった様に思う。スポーツを楽しむつもりで入部したのが何時の間にか鍛錬されていた。最後に、高津のハンドでなく、ハンドの高津を維持されん事を期す。

三年生

# 「和」「精神力」

松倉 建樹

部誌創刊おめでとうございます。

創刊号に寄稿できるというのは僕にとって最大の喜びあり、且つ高校三年間のうち数少ない想い出の一つとして心に残る事と思っています。この機関誌を通じて、高津ハンドボールの技術向上を、いやもっと大切な事である先輩諸兄姉と現役部員との間をもっと緊密に、即ち、人間的、社会的にも「和」を達成することが、この部誌の役割だと信じます。そこで創刊号に寄稿するにあたり、僕は、「和」について、又、それに付随して、「精神力」ということについて少し書いてみた。「和」即ち〝チームワーク〟である。これ程、言行一致の難しい言葉はそう多くあるまい。〝チームワーク〟というものがいかに大切であるかというのは衆知のことである。僕は主将をしていた関係上、より一層心にこびりついている。この原因には、二つあると思う。まず、第一に一年が二年に、二年が三年に頼りすぎていることである。何事につけてもそうである。例えば、少しきつい練習の翌日等、「今日は体の調子が悪いから」という